



劇作家・演出家・俳優

# 内藤 裕敬 氏



### プロフィール

栃木県出身。大阪芸術大学大学在学中の1980年、劇団「南河内万歳一座」を旗揚げ。大阪を拠点に、国内外で演劇活動を行う。劇団外での作・演出も多く、俳優としても唐組・兵庫県立ピッコロ劇団等各演多数。2000年読売演劇大賞・優秀演出家賞受賞。

## 刺激し合い感受性と想像力を引っ張り出す

三島市では、2015年より毎年、市内小学校で演劇ワークショップ「見えないものを見るチカラ」を開催している。2020年は11月に向山小学校・東小学校の4年生が体験した。

講師の内藤裕敬氏は、劇作家、演出家として演劇活動を行うのみならず、感性にアプローチし、芸術的な時間を提供するワークショップを全国で行っている。

——内藤さんのワークショップは、どんな特徴がありますか？

かつて、学校での芸術体験といえば、音楽家による生演奏といったものが主流でした。近年は教育学の専門家の研究により、ワークショップの形は様々に変化し、啓蒙するだけでなく、音楽や演劇、デザインや絵画などの専門的なノウハウを使って、子どもたちの想像力を引き出し、豊かにする時間を提供することが有効なワークショップだと考えられています。

私がやっている「見えないものを見るチカラ」は、演劇や演出論のノウハウを使って、お子さんたちの想像力を様々な引っ張り出すプログラムになっています。

——具体的にどのようなことをするのでしょうか？

知識があればいいのではなく、どう使うかが問われるわけです。その時必要になるのが想像力です。あれとこれをミックスして考えたら、何か今回の謎に近づけるかもしれないとか、この仕事の成功に向けてれないかとか。その想像力が無いと様々なミッションと向き合えないですね。

そういう意味でヨーロッパの方が個性的な発想をするし、オリジナルな取組を開発する。その部分を育むためには、自由な発想を促す。その部分を育むためには、自由な発想を促す。その部分を育むためには、自由な発想を促す。

——三島のワークショップも6年目ですが、どのような感想をお持ちですか？

こんなにワークショップが続いている自治体は他にありません。どの学校も、校長先生がアートやワークショップなどを学校の時間に取り入れることに障壁がなく、先生方もそれを面白いと感じているし、それが子どもたちに必要だと理解されています。行政や教育委員会も含め積極的に動いていて、小学校同

### 自分の想像力を楽しむ感性のワークショップ

まず体を動かし頭や心をほぐすことから始めます。遊びながら少しずつハードルを上げていって、次は何があるんだろう、次は……子どもたちが自覚しないうちに前のめりに自分の想像力を楽しめるようになっていきます。

見えないものをイメージしたり、聴いた曲の中に動物や季節などを探したり。段階を経て絵と曲から心に浮かんだイメージを言葉にし、ワークショップの終わりにには抽象的な現代音楽を絵に表します。そこに引き出された柔軟な発想やイメージの広がり、みんな違って面白い。そんな感性へのアプローチをするワークショップです。

——音楽を聴いたり、絵を描いたり「演劇」のイメージとはちよつと違っていました。演劇のノウハウはどのような部分に活かされているのでしょうか？

俳優は役を演じるために様々な想像力を使います。台本に書かれている言葉だけでなく、その裏側にあるものや行間に眠っているものを想像しないと演じられません。それを稽古場で俳優と演出家が刺激し合いながら作っていくのが演劇です。

士の連携がされているようで、とても気持ちよくやらせていただいています。

学校によって子どもたちも個性があり、いい意味でやんちゃだし、いい意味で集中力があるように感じます。

### コンパクトで緩やかな街

三島はコンパクトでわかりやすく、それをみんなが重宝している感じがします。宿場町として様々な人が出入りしてきた歴史が長い割には、とても整理整頓されていて、どこにでも「掃除当番」がいるみたい。富士山が見えて水が美しく、街も整備され、住んでる人も落ち着いていて、伊豆半島の付け根に、箱根を超えて到達したポッカリとした何か。急流がここでふつとゆるんだ時間の流れがあるような感じがして、とても落ち着きます。大阪から来るから余計そう感じるのかもしれませんがね。



ワークショップの様子

経験の浅い俳優ほど、自分の経験や考えだけから演じようとしてしまいます。すると、経験不足で演技の幅も限定的になります。相手の演技で自分の中に生まれる感情も変わるし、自分のセリフも変わらざるを得ない。私は、「稽古場で相手役からたくさんもらいなさい。そうすることで変わっていく自分を楽しめないと君の潜在的な能力が見えないよ」と指導します。そういう相手との向き合い方やもらい方を重視した稽古をするんです。

### 子どもの中で起きている出来事を面白がる

「見えないものを見るチカラ」は、子どもたちと私の間で想像力を刺激し合い、互いに面白い世界観を見つけられないかの探りあいです。「何か」を僕が子どもにもあげられないか。もしあげられたら向こうから出てくるぞ、というプロセスは、芝居の演出の現場とあまり変わりません。

毎回違う子どもたちが相手なので、相手に合わせて自分の振る舞いやワークショップのプロセスも即興的に変えています。ふたつと同じものになりません。

ワークショップの最後に現代音楽を聴いて絵を描きます。どんな絵ができるかも面白いですが、描いている最中に子どもの内側で起きている出来事、描いている過程が重要だと考えています。

「三島カルチャーをつくる人びと」は、「三島の文化応援プロジェクト」が、三島周辺に拠点を置く企業や三島の文化に関わる方々に、三島の文化についてインタビューするシリーズ企画です。配布場所／生涯学習センター、三島市民文化会館、市内文化施設等 詳しくは下記のwebサイトをご覧ください。

## 南河内万歳一座

南河内万歳一座  
内藤さんが座長を務める劇団です  
<http://banzai-ichiza.com>